慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	竹内良雄さんの定年退職を送る
Sub Title	In commemoration of the retirement of Professor Yoshio Takeuchi
Author	長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.4 (2011.) ,p.1- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	竹内良雄教授退休記念号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20110331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

竹内良雄さんの定年退職を送る

長堀祐造

経済学部教授（中国語）竹内良雄さんがこの三月をもって定年退職される。本誌編集委員会は退休記念特集を企画したが竹内さんは固辞されたので、本号扉に「退休記念号」と題するにとどめることとした。しかし、文学部の関根謙さん（本誌初代編集責任者）とともに、日吉紀要刊行委員会委員長として本誌創刊に尽力された竹内さんの功に鑑み、本号編集委員及び経済学部中国語部会の同僚という資格で、個人的な感想を交えながら竹内さんの経歴、業績を紹介したいという筆者の希望は聞き入れられたので、ここに送別の辞を草する次第である。

竹内さんは、一九四五年八月、日本敗戦の直前に東京都練馬区に生まれた。都立大泉高校時代はボート部の選手（コックス）としてならした。本塾端艇部も合宿所を持つ埼玉県戸田市のボートコースには氏の少年時代の足跡も残されているわけだ。

その後、一九六五年、東京都立大学人文学部中国文学科に入学。日本における魯迅研究の先駆者、竹内好氏は六

〇年安保闘争時にすでに岸内閣に抗議して都立大学を去っていたが、その学生たちが院生として在籍しており、竹内好の影響が竹内良雄にまで及んだことは言うまでもない。竹内さんは竹内好氏の謦咳に接した最後のお弟子さんの一人ということになる。一九六九年、竹内さんは都立大学中文専攻の大学院修士課程に進学するが、折しも大学闘争の真っ只中。おそらくは全共闘シンパであったと思われるが、当時の指導教授は今村与志雄氏、生活面では竹内実氏にも随分お世話になったという。ちなみに卒論は松枝茂夫氏に提出したとのこと。唯一健在の竹内実氏とは今もお付き合いがあるそうだ。このあたりの師弟関係や先輩後輩関係は後述の竹内さんの業績にも色濃く反映している。

脇道にそれるが、私が竹内さんから聞いた昔話の中で印象に残っているのはまず竹内好氏の葬儀でのこと。一九七七年三月に氏は亡くなるが、その葬儀で弔事を読んでいた、同じく著名な魯迅研究者で魯迅から直接個人教授を受けた経験を持つ増田渉氏が心筋梗塞で突然倒れ、そのまま不帰の人となった。これは衝撃的な出来事で、当時大学三年だった私もよく覚えている。ちょうど春休み中で、読書会の合宿で伊豆に向かう朝の新聞で読んだ記憶がある。竹内さんはこの場に主催者側として参列しており、この様子をつぶさに目撃していた。葬儀委員長だった埴谷雄高氏がてきぱきと指示を出して増田氏を病院に搬送する手配をしたということだ。私たちの世代からすると、ここに登場する竹内好、増田渉、埴谷雄高といった人たちはすでに歴史的人物でスター的存在だったから、こういう話は興味深かった。私は竹内好氏と会う機会はなかったが、一九七六年のことだったと思うが、東大本郷の中文科にいた頃、中文研究室の隣の漢籍コーナーに入っていく好氏の後ろ姿を見かけたことがある。先輩か助手の誰かが、あれが好氏だと教えてくれたのは覚えている。そこで竹内さんが話してくれる竹内好氏についてのいくつかのエピソードは何となく有り難みが増すのだった。その他、竹内さんが竹内実氏の何かのお祝いの会に出かけた話も記憶に残っている。これは全共闘運動の頃のことと関係がありそうだと思ったが、この辺りになると、竹内さんの口は

重くなる。竹内実氏はあの世代の日本の魯迅研究者の中では珍しく、トロツキーに関して早くから一定の認識があり、中共、毛沢東それに竹内好の魯迅評価から一定の距離を保持していたので、その辺のことも竹内さんから聞いてみたかったが、これはまたこれからのお楽しみということにしたい。

さて、都立大の修士課程を経て社会に出た竹内さんであるが、当時の中文科大学院出身者にそうそう専任職があるはずもなく、平凡社や集英社などで編集の仕事や翻訳などを手がける。平凡社では『ドキュメント現代史』シリーズの16、竹内実編『文化大革命』（一九七三年）所収の井岡山兵団著「智をもって王光美をとりこにする」を訳している。また集英社での仕事としてはシリーズ『人物　中国の歴史』全十巻別巻一がある。各巻付録の人物注や年表作成、別巻『故事と名言でつづる中国史』の一部執筆担当、編集整理などに当たった。さらに私たちの大学時代に現代評論社から出たシリーズの一冊『毛沢東　文化大革命を語る』（一九七四年）でも竹内実氏の翻訳を手伝ったりしている（いずれも後掲リストには載っていない）。やがて、法政大学、学習院大学などでも中国語の非常勤講師を長らく務めることとなった。苦節二十年、立間祥介氏と今は亡き西野広祥氏によって慶應義塾大学経済学部に中国語専任教員として迎えられたのは一九八九年のことである。一九九五年、教授に昇格し現在に到るが、この間、一九九三年には慶應義塾の派遣により、北京中央戯劇院に一年間留学している。受入れは著名な演劇研究者、田本相教授であった。また、経済学部専任教員就任後も非常勤講師として中央大学、法政大学に出講、さらに三田中文科の兼任講師として専門の中国現代文学の授業も担当した。塾内の校務にも広く関わり、主なところでは経済学部学習指導主任（他大学で言うところの教務主任と学生部主任を兼ねたような役職）や運営委員（経済学部ではこれが学部執行部に当たる）などを歴任、日吉では図書予算や研究室運営を司る研究室運営委員、日吉の全紀要の刊行母体である日吉紀要刊行委員会委員長の任にも当たり、本誌『日吉紀要・中国研究』創刊に尽力したことは上

述のとおりである。日吉中国語部会幹事としても部会予算、会合の設定など色々お世話頂いた。さらに、現文学部長の関根謙さんが主催し、私たち日吉の中国現代文学を専門とする教員や三田中文の院生や卒業生が参加する日吉中国現代文学研究会の主要メンバーとして研究会を盛り上げてくれたことも忘れられない。慶應着任後の竹内さんはまさに水を得た魚のごとき活躍であった。

次いで、竹内さんの主要な業績について紹介しておきたい。これは渋る本人からようやく提供を受けたリストによるものである。

主要著書・共著・編著

一九八八年十一月　『史記小事典』　徳間書店　共著（編者・久米旺生　丹羽隼兵　竹内良雄）
一九九八年七月　『三国志ガイドブック』　三省堂　編著（編者・竹内良雄）

論文等

一九九一年八月　「魯迅と母とひとつの出来事」　『日吉紀要・言語・文化・コミュニケーション』No.8
一九九三年三月　「魯迅の光復会加入年の一考察」　『日吉紀要・言語・文化・コミュニケーション』No.11
一九九五年六月　「魯迅の初期文学観の成立を探る――魯迅自身が編んだ『小説訳叢』をもとに」　『日吉紀要・言語・文化・コミュニケーション』No.15
二〇〇六年十二月　「『先鋒派文学』からの離脱――蘇童小伝そして余華」　『中国現代文学の越境』勉誠出版
二〇〇八年三月　「遅子建、覚え書き――北極村から北極村へ」『日吉紀要・中国研究』第一号

翻訳

一九七一年十月　「野百合の花」　原著者：王実味　河出書房『現代の中国文学』第十二巻
一九七二年十一月　『史記Ⅵ』　共訳　原著者：司馬遷　徳間書店

一九七五年四月　『十八史略Ⅱ』　共訳　原著者：曾先之　徳間書店
一九七六年十一月　『史記』上　共訳　原著者：司馬遷　さ・え・ら書房
一九七七年二月　『史記』下　共訳　原著者：司馬遷　さ・え・ら書房
一九七九年九月　『三国志Ⅳ』　共訳　原著者：陳寿　徳間書店
一九八〇年二月　『三国志別巻』　共訳　原著者：陳寿　徳間書店
一九九〇年四月　『顔氏家訓』　共訳　原著者：顔之推　徳間書店
一九九一年一月　「ああ、古い航路よ」　原著者：白樺　蒼蒼社『季刊中国現代小説』十六号
一九九二年七月　「早春の日に」　原著者：馮驥才　蒼蒼社『季刊中国現代小説』二十二号
一九九五年四月　「浄火」　原著者：蔣子龍　蒼蒼社『季刊中国現代小説』三十三号
一九九六年二月　「あの人は生きている」　原著者：馮驥才　蒼蒼社『季刊中国現代小説』三十六号
一九九七年四月　「ハートのクイーン」　原著者：蘇童　蒼蒼社『季刊中国現代小説』三十九号
一九九八年一月　「恩讐」　原著者：王青槐　蒼蒼社『季刊中国現代小説』四十二号
一九九八年十月　「伝えてくれ、ツルに乗って行ったと」　原著者：蘇童　蒼蒼社『季刊中国現代小説』四十五号
一九九九年四月　「ねえ、雪見に来ない」　原著者：遅子建　蒼蒼社『季刊中国現代小説』四十七号
二〇〇〇年四月　「貨車」　原著者：蘇童　蒼蒼社『季刊中国現代小説』五十一号
二〇〇一年一月　「煙波に一芥の舟」　原著者：聶鑫森　蒼蒼社『季刊中国現代小説』五十四号
二〇〇二年一月　「用意はいい？」　原著者：戴来　蒼蒼社『季刊中国現代小説』五十八号
二〇〇二年十月　「待ちながら」　原著者：戴来　蒼蒼社『季刊中国現代小説』六十一号
二〇〇三年十月　「突然に」　原著者：戴来　蒼蒼社『季刊中国現代小説』六十五号
二〇〇四年七月　「老夫婦と愛馬」　原著者：遅子建　蒼蒼社『季刊中国現代小説』六十八号
二〇〇九年三月　「思い出すままに」　原著者：蘇童　『日吉紀要・中国研究』第二号

ここからもわかるとおり、竹内さんは主要には中国現代文学を研究対象としてきたが、中国の古典に関する造詣も深く、研究業績は広範囲にわたる。古典方面の主著としては『史記小事典』、『三国志ガイドブック』があるが、後者は陳舜臣氏が監修者として序を寄せている。いずれも便利な事典で、私なども折々利用している。また訳著には『史記Ⅳ』『十八史略Ⅱ』『三国志Ⅳ』『三国志別巻』『顔氏家訓』があるが、これは竹内好氏が門下の中国現代文学研究者らに振り当てた仕事でもあった。先に触れた生前の西野広祥氏から聞いたところでは、この徳間の古典シリーズはロングセラーとなって訳者の皆さんが定職のない頃、またその後も随分と経済的に助かったということだ。それは置くとしてこれらの本は専門研究者にとどまらず、幅広い一般読者層から好評を博し、中国古典の普及に果たした功績は小さくない。さ・え・ら書房版の『史記』は児童向けの本だが、このシリーズは産経児童文学賞を受賞してもいる。

現代文学方面の研究では、「魯迅と母とひとつの出来事」、「魯迅光復会加入年の一考察」、「魯迅の初期文学観成立を探る――魯迅自身が編んだ『小説訳叢』をもとに」など魯迅に関する論文を『日吉紀要・言語・文化・コミュニケーション』に精力的に掲載、さらに当代の作家、蘇童、余華、遅子建らに関する論文、「『先鋒派文学』からの離脱――蘇童小伝そして余華」（『中国現代文学の越境』所収）、「遅子建覚え書――北極村から北極村へ」（『日吉紀要・中国研究』創刊号掲載）を発表してきた。また、都立大出身者を中心とする中国現代文学の翻訳誌、『季刊中国現代小説』にも多くの優れた翻訳作品を残し、かつ編集委員としても活躍した。個人的好みで言えば、白樺の「ああ、古い航路よ（啊，古老的航道）」などを選んで訳しているのは慧眼だ。こうした竹内さんの功も幾分か寄与したに違いないが、『季刊中国現代小説』は中国語教育・日中文化交流などに貢献した個人や団体の研究業績に授与される第六回「日中学院倉石賞」を一九九四年度に受賞している。

ここで、さらに個人的な関心で言えば、延安時代の中共の官僚主義を鋭く批判して粛清された王実味の文章「野百合の花」の最初の邦訳者が竹内さんであることも、魯迅とトロツキーの周辺を研究してきた者としては奇縁を感ずるところでもある。王実味のこの文章はとても美しい心で書かれている。これに触発された毛沢東の「文芸講話」の方は歴史的使命をとうの昔に終え、すでに淘汰済みと言っていいが、王実味の「野百合の花」は時間の審判にいまだ堪えている。ある意味それは不幸なことと言えなくもないが。本編が収録された河出書房の『現代の中国文学』第十二巻「評論・散文」巻は竹内実氏の解題になる。実質的に竹内実氏の責任編集だったのであろう。それで竹内さんにお鉢がまわってきたと考えられる。同シリーズの編集委員は小野忍・高橋和巳・竹内好・武田泰淳・松枝茂夫だったが、これも時代のなせる配役であった。高橋和巳はシリーズ完結を見ることなく、一九七一年五月に亡くなっている。恥ずかしながら、十五の私が竹内好や武田泰淳ゆかりの浦和の街を歩きながら中国文学をやろうと決意したのはこの時のことだったので忘れようがない。ちなみにこの五年後、岩波書店から出た西順蔵編『原典中国近代思想史』第五巻「毛沢東思想の形成と発展」に収録された「野百合の花」の翻訳者は丸山昇氏であった。

最後に『日吉紀要・言語・文化・コミュニケーション』に掲載された竹内さんの一連の魯迅関連論文についてもひとこと言い添えるなら、これらは堅実な考証に支えられた論文で、特に教授昇格論文でもある「魯迅の初期文学観の成立を探る――魯迅自身が編んだ『小説訳叢』をもとに」は一九九三年の北京留学中に魯迅博物館で調査した『小説訳叢』（魯迅が留日時代、日本の雑誌に翻訳紹介された西洋文学作品を自ら切り抜いて保存したスクラップノート）をもとに、魯迅初期小説にこれら諸作がどのような影響を与えたかを考察する論文で、『魯迅研究月刊』一九九五年第七期にも掲載された。中国でも高い評価を得たことが伺える。

以上、甚だ簡単な紹介だが、竹内さんの経歴と業績の一端をご理解頂ければ幸いである。

時のたつのは実に速いもので、竹内さんは日吉在職二十二年ということだが、私はそのうち十八年をご一緒したことになる。その悠揚迫らぬ為人は近くにいる者を心和ませる一方、基本的に的確な状況判断と事務処理能力は、後続の私たちも大いに見習うべきところである。長年のご厚情にこの場を借りて謝意を表したい。

語りつくせなかったことごとは、また今後の再会の口実にするまでだが、それにしても高度成長期以前を知る、昔話の相手がいなくなるのは寂しいものである。

擱筆にあたり、決まり文句ではあるが、竹内さんご自身の今後のご活躍とご家族のご健勝を切に祈念する次第だ。

ともあれ、定年おめでとうございます！　まだまだ仕事が続くにしても、とりあえず、お疲れ様でした！